



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第17主日 B年 (2021年7月25日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記下 4章42—44節

第二朗読：エフェソの信徒への手紙 4章1—6節

福音朗読：ヨハネによる福音 6章1—15節

ミサを構成する四つの動詞、  
「取って」、「祝福し」、「割って」、「与える」

三つの朗読から

第一朗読の「食べさせなさい」(42節)は、神さまの言葉が人間に向かうという事実を教えてください。神さまは特に人間の窮乏に関心をお寄せののです。そして「主の言葉のとおり」(44節)とありますから、神さまの言葉は必ず実現するということがわかります。神さまの言葉には力があるのです。そして、最後にある「残した」(44節)で、神さまからの恵みは有り余るほどのものであることが示唆されます。

第二朗読の「招かれた」(1節)は心に留めたいです。神さまからの招きは、高ぶることなく、柔和と寛容の態度をその人にもたらすのです。

福音朗読には、第一朗読と同じようにパンが増えたという記述はありません。またパンを増やすための呪文のような言葉もありません。福音では感謝の祈りを唱えたこととあるだけです。しかし、食べた残りについて語ることで、パンが増えたことが暗示されています。増えたことを伝えるのが二つの朗読箇所の真意ではなかったように思います。むしろ「満腹した」という状態、「しるし」を伝えたかったのではないのでしょうか。

説教

「さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた」(ヨハ6章11節)は、とても印象深い一文です。

まず、イエスさまが五千人もの人に「分け与えられた」ことが分かります。同じような物語のほかの福音書ではお弟子さんたちが配ります。しかし、今日の朗読の箇所では、イエスさまが与えていくのです。しかも欲しいだけ分け与えます。

ミサの中で司祭はホスチアを聖別する際に「主イエスは、すすんで受難に向かう前に、パンを取り、感謝をささげ、割って弟子に与えて仰せになりました」と唱えます。「パンを取り」、「感謝をささげ」、「割って」、「与えて」の四つの動詞はミサをつくりあげる大切な言葉です。今日の福音でもイエスさまはパンを取りあげ、感謝の祈りをささげながらパンを祝福し、パンを割って(裂いて)、そしてその割ったパンを与えます。ミサの中で救い主イエス・キリストが働かれます。ガリラヤの湖の湖畔で行った業が、今日、ミサの中で行われるのです。もちろん、行ってくださるのは祭儀的に現存しておられるイエスさまご自身です。

「取る」、「感謝をささげる(祝福する)」、「割る(裂く)」、そして「与える(配る)」の四つの動詞は、ご聖体を制定する聖変化の場面だけの言葉ではありません。ミサ全体を決定する言葉にもなります。わたしたちは、この世から「取られます」。「取られて」ミサへと参加します。そして、ミサの中で「感謝をささげます」、その結果、ミサの中で「祝福されます」。しかし、ミサの中で祝福され、満腹したところは、ミサ後にこの世によって「裂かれ」ます。それほど、この世には厳しく、辛い現実が待ちかまえているのです。ミサで得られたところを保てないのは、実は神さまのあるお思いがあつてのことです。なぜなら、満腹したところだけでは神さまの愛が人々に行きわたらないからです。イエスさまを通して示された愛を人々に「与える(配る)」ために、わたしたちはこの世で粉々に「割られて」いくのです。

今日の福音は過越祭の頃のできごとです。過越祭は春のお祭りでした。春の暖かな野原の上で、人々のために感謝の祈りを唱え、パンを分け与えていくイエスさま。その同じイエスさまが、ミサの中でわたしたちのこころを満腹にしてくださるのです。

